

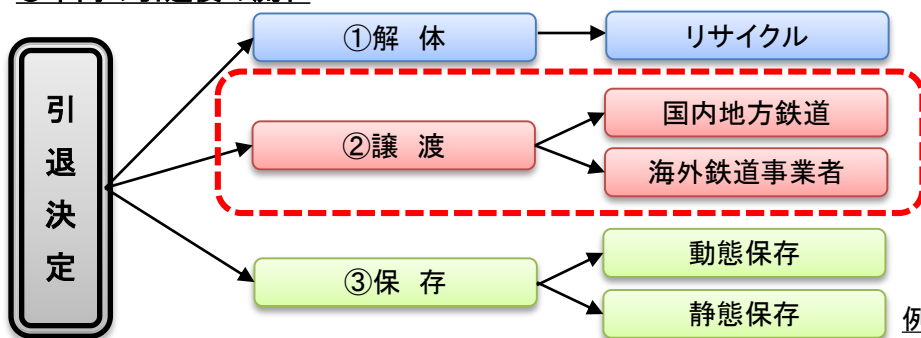
「車両譲渡」編

東京メトロ路線で活躍した車両は、引退後、国内外の事業者に譲渡し、第二の人生を歩んでいるケースが数多くあります。今回はこれまでの東京メトロ車両の譲渡実績をご紹介します。

車両引退後の行方

東京メトロの車両は長いもので約半世紀運行し、その役目を終えています。運行を終了した車両は基本的には解体されますが、必要に応じて譲渡、保存も行われています。解体の際はアルミ製の車体や座席のクッション材などの部品はリサイクルされ、自動車部品などに転用されています。一方、国内の地方鉄道や国外の鉄道事業者に譲渡され、新天地にあった車両の仕様に改修された後、現地で走り続けている車両も存在します。

◎車両の引退後の流れ



【5000系船積みの様子】

例: 地下鉄博物館1000形

引退後国内地方鉄道に譲渡された車両

国内の地方鉄道への譲渡についてはこれまでいくつかの事業者に対して実績がございます。既に廃車になってしまった車両もございますが、一方で各事業者の仕様に變更されて今なお最前線で稼働している車両も存在しています。

銀座線2000形

日立電鉄・銚子電気電鉄



茨城県日立市を走っていた日立電鉄、千葉県銚子市を走る銚子電鉄では、かつて銀座線を走っていた2000形車両が使われています。東京メトロの車体の長さの多くは1両20mですが、この車両は1両16mと小型であったことが活躍の場を移す決め手となりました。銀座線は軌間(レールとレールの幅)が1435mm、電気の供給方法が走行レールの横にもう一つ通電するレールが設置された「第三軌条式集電」に対し、両社の鉄道は軌間1067mm、車両上部に張った架線から電気を供給する「架線式集電」であったため、そのままでは運転できず、台車装置やパンタグラフなどを改造して導入されました。残念ながら日立電鉄は2005年に廃止され、銚子電鉄の2000系は2015年に引退しており、営業線を走る姿はもう見るできません。

日比谷線3000系

長野電鉄

長野県長野市を中心に路線網を持つ長野電鉄には、かつて日比谷線で活躍していた3000系を譲渡しました。車体の長さが18mと小型な車体は長野電鉄でも好評で、日比谷線時代にはなかった冷房車も長野電鉄で改造されて登場しています。

この車両は現在も長野電鉄3500系・3600系として活躍を続けています。



東西線5000系

東葉高速鉄道

東西線西船橋駅から先の延長区間として1996年4月に西船橋～東葉勝田台間で開業した路線が東葉高速鉄道です。東西線との直通運転開始にあたり、もともと東西線を走っていた営団地下鉄(現・東京メトロ)の5000系を譲渡し、車両ボディの帯色や車両前面の形状を改造して運用され、東西線では引退した5000系が古巣に乗り入れるという状況が発生していました。こちらの車両は既に営業運転を終えています。



銀座線01系

熊本電気鉄道



銀座線で活躍中の01系が1000系への更新に伴い熊本電気鉄道に譲渡され、上熊本～北熊本間で2014年から営業運転を開始しています。導入にあたっては電気の供給方法が異なる(第三軌条方式⇒架線集電方式)ためシングルアーム式のパンタグラフを2台搭載する形に改造されています。また、軌間も異なるため、台車装置も変更されました。

2015年にはヘッドマークを付けた譲渡記念列車を東京メトロ・熊本電気鉄道双方で運行しました。

海外で活躍している車両

海外事業者に対してこれまでアルゼンチンとインドネシアの2か国に車両譲渡しています。

丸ノ内線500形

アルゼンチン共和国ブエノスアイレス

丸ノ内線の500形車両は、太平洋を越えた南米のアルゼンチン共和国ブエノスアイレス市に渡っています。日本の丸ノ内線と走行条件が一緒だったことからほぼそのままの状態で活躍しています。赤いボディにサインカーブを施したデザインが特徴で、40年近く丸ノ内線の顔として親しまれたこの車両は1995年にアルゼンチン共和国ブエノスアイレスに渡りました。

20年以上活躍した2016年、鉄道技術の発展に貢献した車両として保存するため一部車両が里帰りしました。



東西線5000系・05系

千代田線6000系

有楽町線7000系

インドネシア共和国ジャカルタ



インドネシア共和国ジャカルタでは、過去に東京メトロで活躍していた車両が多数走り続けています。空調がついていることや車両の性能が優れているとの評価を受け、鉄道の発展途上国にとって、日本の中古車両は人気が高く、現地の人々にとって欠かせない存在になっています。また、アルゼンチンに渡った丸ノ内線500形車両と同様、軌間1067mm、架線方式等規格が日本と類似していることから、比較的小規模な改造のみで運用を開始しています。

まとめ

東京メトロでは今後も車両引退の際は、解体におけるリサイクル性の向上を考慮しつつ、譲渡などによるリユースによって社会貢献に努めてまいります。

東京を走らせる力

